

# 秩父市立南小学校における インターナショナルセーフスクール活動

執筆 南小学校長 倉澤俊夫

## 1. インターナショナルセーフスクール (ISS) 着手の経緯

### 1-1. 南小学校が ISS に取組んだ背景

秩父市は、2012年より SC (セーフコミュニティ) を推進し、2015年に国際認証を取得しています。SCを推進する中で、ISSを同時に推進できないかとの打診が教育委員会からあり、秩父第二中学校区の3校(秩父第二中学校、花の木小学校、南小学校)がSCの学校版である「インターナショナルセーフスクール」(以下ISSと記する。)の国際認証をめざすこととなり、2013年7月22日、2年後(2015年11月)の国際認証取得に向けた取組みの開始を宣言しました。

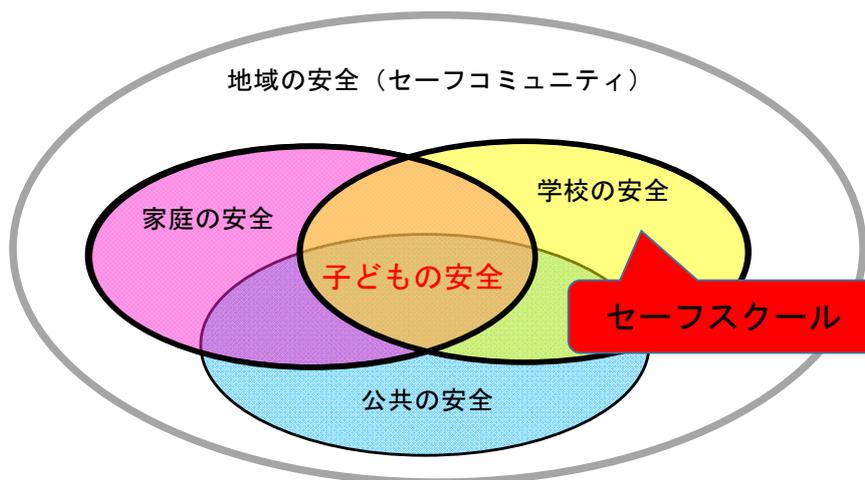


図1 セーフコミュニティ及びセーフスクールの取組みイメージ

### 1-2. なぜ、ISSに取り組んだのか。

ISSは(体及び心の)ケガ及びその原因となる事故、いじめ、暴力を予防することによって、安全で健やかな学校づくりを進める活動です。学校には様々な課題がありますが、その課題を解決していくためには、予防に力をいれていくことが重要です。予防に力をいれるISS活動を通して、ケガ、いじめ、交通事故の防止等の学校の課題が解決できるのではないかと考えました。

具体的には、

- ① データに基づく活動は学校が最も苦手とする部分である。データに基づいた活動は日々の教育活動に変化をもたらすのではないかと

- ②子どもを主体とした教育活動の重要性が叫ばれる中、ISS 活動を通して、自尊感情を高める機会となるのではないか。
- ③高学年の児童の主体的な活動の時間を確保することで、6年生を核とした教育活動を展開することができるのではないか。
- ④ISSの活動を通して、いじめ問題への具体的な活動ができるのではないか。  
といった期待を持ってISS活動を開始しました。

### 1-3. ISSを開始するにあたっての周囲の反対や心配

ISSを開始するにあたっては、全国的にみても、まだISS認証を受けた学校が少ない中で、職員間でISSについて共通理解を図り、学校全体として取組むにはどうすればいいのか、といった不安がありました。また、ISS活動を現在ある教育課程の中にどのように位置付けるのか、ということは大きな課題でした。

加えて、国際認証を取得するための「8つの指標」については、どう理解し、クリアしていったらよいのか、という不安もありました。根拠（エビデンス）に基づく活動を行っていくために、どのようにデータを収集し、課題を明確にし、評価していくのか・・・取組を開始した当時は試行錯誤の連続でした。

## 2. ISS活動の展開

### 2-1. 地域や保護者との連携のための工夫

従来から、南小学校の保護者や地域は学校に対して協力的です。そこで、「ISSとは何か？」という方々が多い中、ISSを知ってもらうために地域と学校をつなげる「場」を設定するため、町会長、民生児童委員、保護者などをメンバーとする「南っ子安心安全ネットワーク会議」（図2）を組織しました。毎学期1回の会議を開催し、ISSに対する理解を得る場とすると同時に「地域の安全マップ」づくり等の活動も行いました。

このように、地域のことを最もよく知っている、町会長、民生児童委員にISSの推進メンバーになっていただくことよって、ISS活動に対する絶大な支援をいただくことができました。



図2 南っ子安心安全ネットワーク会議

## 2-2. 学校行事や諸活動の中に溶け込ませるための工夫

私は、南小学校で進められていた ISS をテーマとした研究（3年間）の2年目で校長として着任することとなりました。そこで、年度当初、南小の ISS の何ができていて、何が課題であるのか見極め、認証までの2年間を見通したビジョンを示すことが、職員が安心して ISS に取組む上で重要であると考えました。

まず、ISS の活動時間を確保するために、週1回、水曜日の午後、13時10分から30分間を「セーフスクールタイム」として、日課表の中に位置付けることにしました。この「ISS の活動時間」を確保したことによって、職員、子ども達が余裕をもって活動に取り組むことができ、ISS の活動が活発になったと考えています。



図3 ISS 代表者会議

児童については、既存の児童会組織を ISS の活動のための組織として改変し、ISS 代表委員会を中心とする「ISS 代表者会議」（図3）を開催し、学期毎に ISS 活動報告会を実施しました。また、ISS の取組みを児童に浸透させるために、ISS のマスコットキャラクターを児童から募集し、マスコットを「ミナミン」（図4）と命名しました。そして、「ミナミン」の着ぐるみを作成し、ハイタッチ・あいさつ運動などの活動を行いました（図5）。その他、「ミナミン」の旗（図6）、「ミナミン」絵描き歌（日本語バージョン、英語バージョン）の作成（図7）、「ミナミンスタンプ」等を作成していきました。「ミナミン」の旗は、ISS 代表委員の児童が毎日掲揚します。

このような取組みの結果、児童の中に、ISS＝「ミナミン」という意識を定着させることができ、児童会で決めた「安全で楽しく元気な南っ子」というスローガン（図8）を言えない児童はいないくらい、ISS を学校内に浸透させることができました。



図4 ISS マスコットキャラクター



図5 「ミナミン」の着ぐるみ



図 6 「ミナミン」の旗の掲揚



### The Song for Drawing a Mascot Character of the Safe School

There is a weirdly shaped fish tank.

On top of the lid, a helmet

Is it safe to cross the crosswalk?

We have to double check for safety.

“Right hand side?” “Safe!”

“Left hand side?” “Safe!”

Go go go, let's go!

As we fish are getting along.

We have drawn Minamin!

Talalala...Minamin!

(By a melody of the Mickey Mouse March)

図 7 「ミナミン」絵描き歌(英語バージョン)



図 8 ISS のスローガン

### 3. 取組みの成果

#### 3-1. 体と心のケガに関する変化

以下では、申請書の指標7「予防活動の効果・影響を測定・評価する方法がある」について、体と心のケガに関する変化を分析していきます。最も重要なことであるプログラムの進行管理は、「南小 ISS 推進委員会」が中心となっています。プログラムにおける PDCA サイクル（図 9）を展開する中で、セーフスクール国際認証センターの指導者、秩父市教育研究所、秩父市危機管理課、その他外部の指導者に来校いただき、各取組みや進行管理について指導・助言を受けています。また、「南っ子安心安全ネットワーク会議」（年 3 回開催）において、保護者、地域の方々の意見を伺い、活動の改善に努めています。

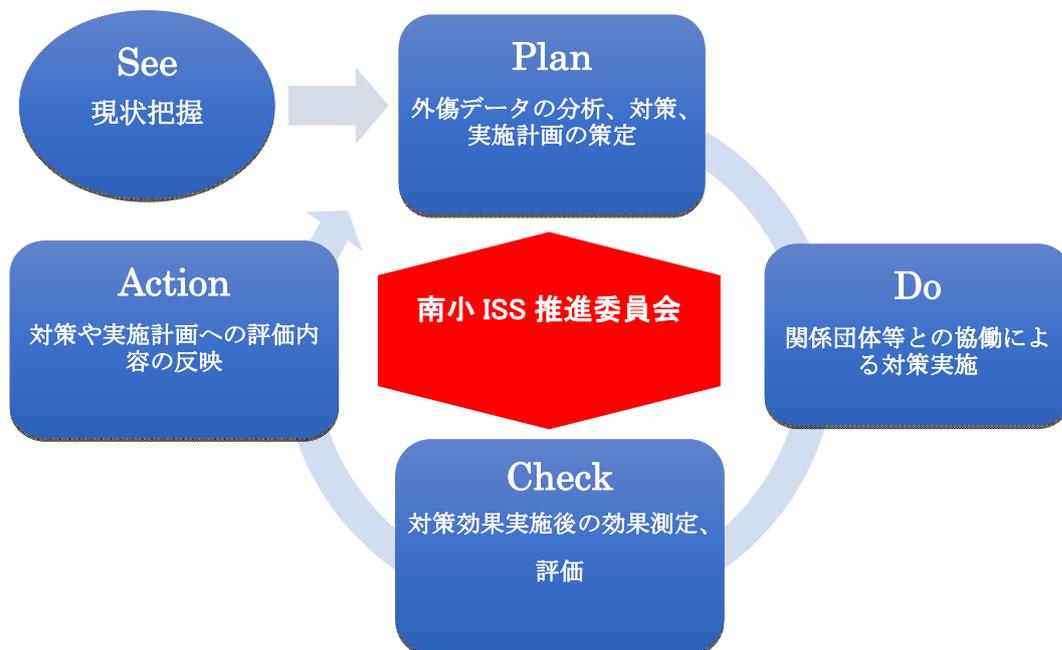


図 9 プログラムの PDCA サイクル

#### 3-2. 学校内の安全について

学校内の安全については、下記のとおり目標を設定して取り組みました。その結果、様々な変化がみられるようになりました。

##### (1) 目標

学期はじめのケガ、10、11月のケガを減らす。すり傷を減らす。休み時間のケガを減らす。運動場でのケガを減らす。通院を要するケガを減らす。

## (2) 取組みによる児童の変化

取組みを通して、様々な変化がみられるようになりました。具体的にいくつか紹介しますと、通院を要するケガについては減少させることができました（図 10）。他方、ケガによる保健室来室人数は、2014 年度より 2015 年度の方が多くなっていることがわかります（図 11）。しかし、来室者数については、単に数が減ればよいというわけではありません。来室回数の多い児童に、家庭環境や友人関係などで心の問題を抱えている場合もみられるため、今年度は、昨年度まで台帳に記録されなかった本当に小さなケガも含めて、記録をより詳しくとってみました。そのため、昨年度より来室者数が増加したと推測されます。

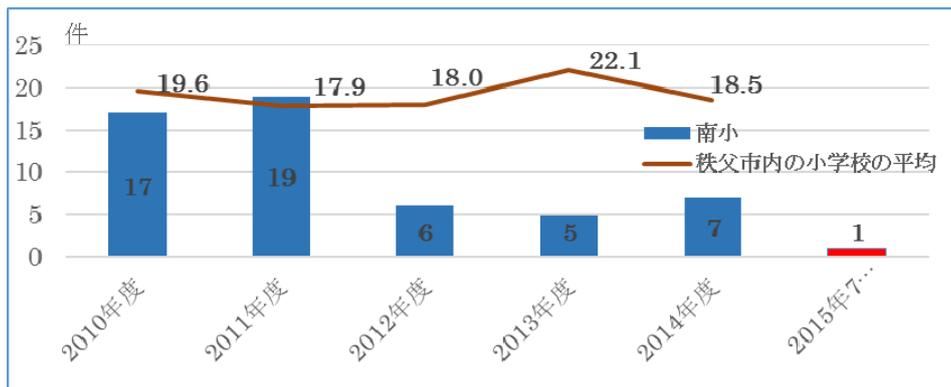


図 10 災害給付申請件数の推移



図 11 ケガによる保健室来室状況

### 3-3. 学校外の安全について

本校では、自転車による登校はないものの、交通手段として放課後や休日などで自転車に乗る機会が大きいことから、登下校の交通安全に加えて自転車乗車時の安全にも焦点を当てました。

#### (1) 目標

児童交通事故件数を減らす。交通事故ヒヤリハットを減らす。自転車事故を減らす。自転車ヘルメット所持率及び着用率を増やす。危険を予知し、回避できるような力を身につけさせる。

#### (2) 取組みによる児童の変化

本校における児童の交通事故発生件数は、2014年度は3件でした。これは、テレビCMやテレビ番組で秩父が取り上げられ、PRされたことで観光客が増加し、車の交通量が激増したことも要因の一つとして考えられます。2015年度にも、6月に6年生による自転車での交通事故が1件発生しました。この事故は左折する時に接触したもので、大事には至りませんでした(図12)。

2015年6月の安心・安全アンケートによれば、ヘルメット着用者が26人(2014年11月)から53人に増加しました。着用率も12.2%(2014年11月)から27.3%(2015年6月)に増加しています(図13)。少しずつではありますが、取組みの成果が出てきています。今後も、ヘルメット着用者の増加をめざし、取組みを進めていきます。

2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
1件	1件	2件	3件	1件

図12 南小児童の交通事故発生件数<sup>1</sup>

	2014年11月	2015年1月	2015年6月
ヘルメット着用児童数/全児童数	26人/213人	32人/210人	53人/194人
ヘルメット着用率	12.2%	15.2%	27.3%

図13 ヘルメット着用者数・着用率の変化

### 3-4. 心のケガの防止について

心のケガについては、コミュニケーション能力をはじめ、人間関係を構築する能力に着目しました。

#### (1) 目標

人間関係作りのスキルを持った児童を増やす。言葉や暴力によるトラブルを減らす。インターネットの危険性と安全な使い方について理解できる児童を増やし、ネットトラブルを減らす。児童交通事故件数を減らす。交通事故ヒヤリハットを減らす。

<sup>1</sup> 南小学校で把握した、南小児童の交通事故の数を示す。

## (2) 取組みによる児童の変化

生活アンケートでは、記名による調査を行い、調査後、個別に対応しています。道徳で心を豊かにし、ライフスキル教育でコミュニケーションのスキルを学び、「いじめノックアウト宣言」で「いじめ」に対する意識を高めてきた結果、暴力や暴言、無視や仲間はずれといった事例が減少してきています(図 14)。

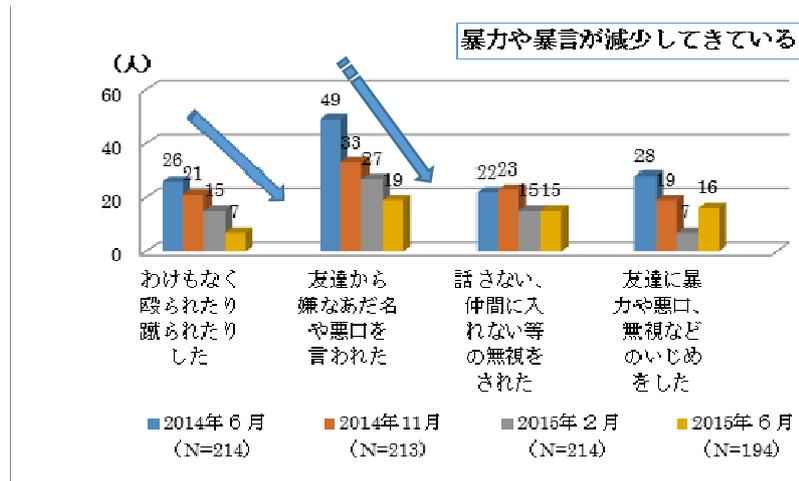


図 14 いじめに関する実態調査<sup>2</sup>

特に高学年の加害意識が増加しているのは、「いじめ」についての意識に変化が起き、自分の言動を振り返っている現れととらえています(図 15)。

4月に学年が一つ上がりますが、気になる児童については、パネル調査により状況を追っています。また、縦割り班清掃など異学年交流を充実させたことで、高学年にリーダーとしての自覚が高まってきていることが清掃中の言動からうかがえます。

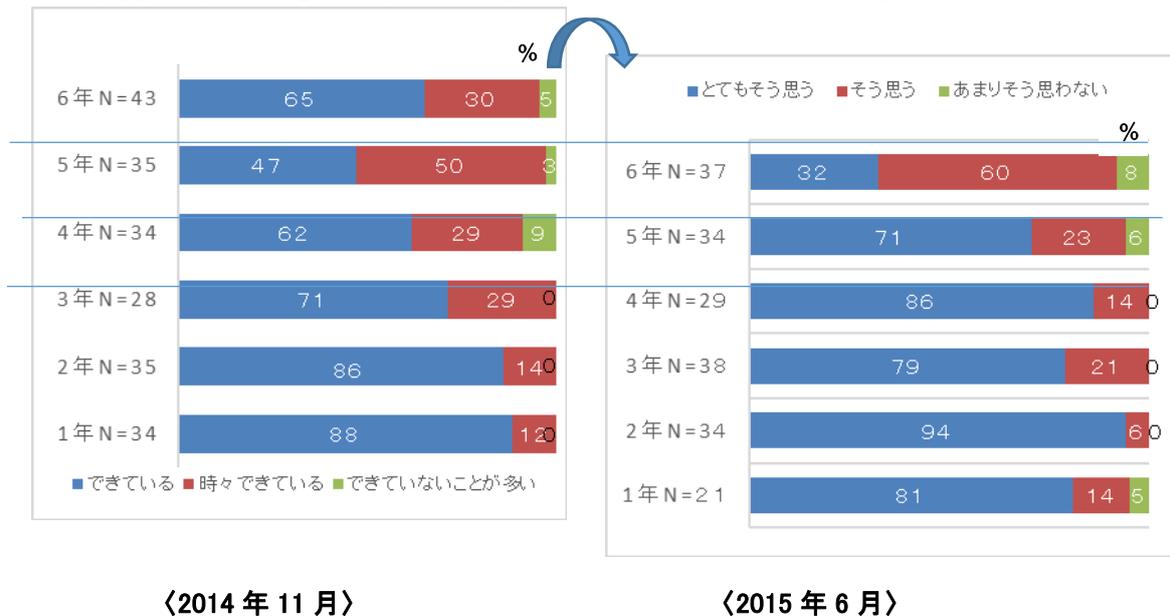


図 15 「言葉で友達を傷つけないようにしている」児童の割合<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 出典 生活アンケート

全体として言動で傷つけることのないよう努力している児童が増えた。

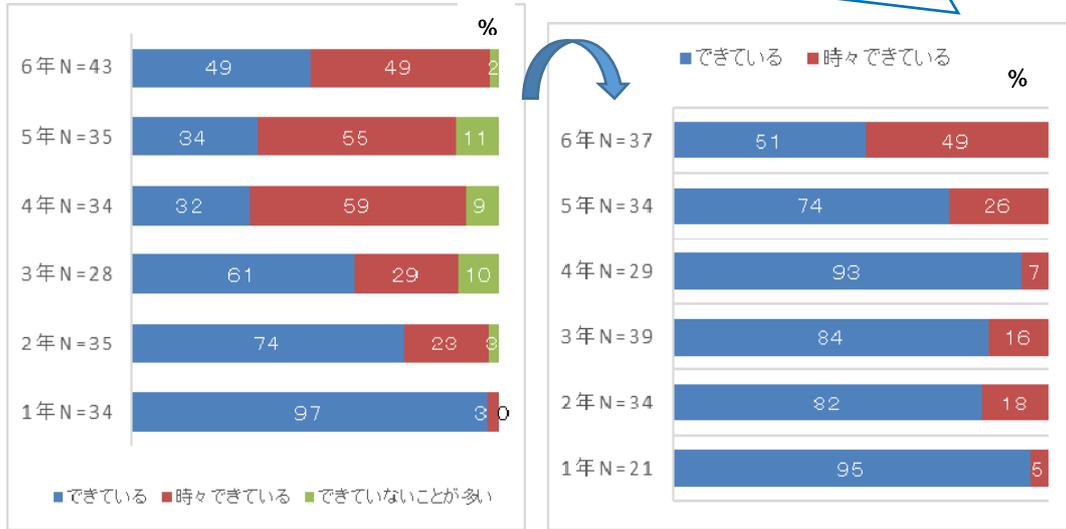


図 16 「友達の嫌がることをしていない」児童の割合<sup>4</sup>

いじめを許さないという意識が高まっている。

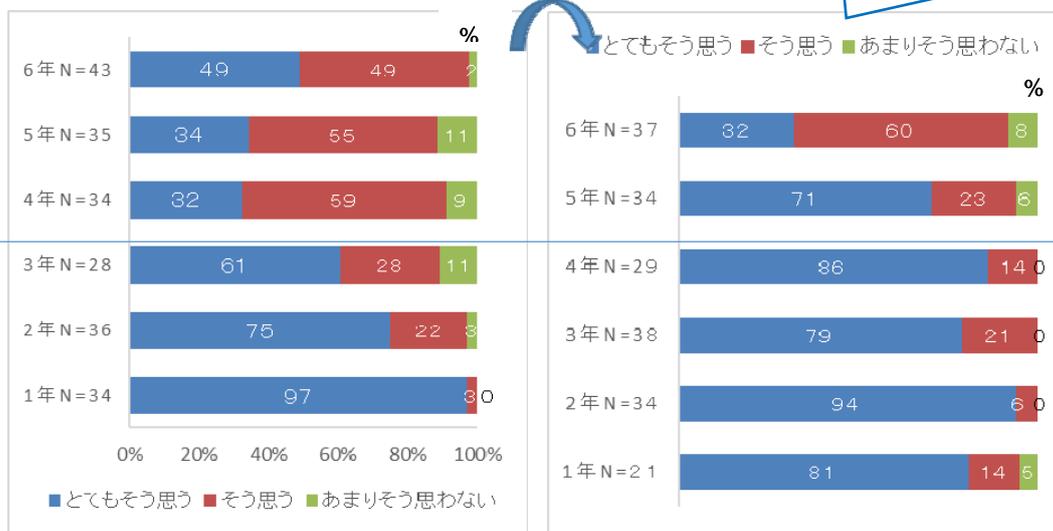


図 17 「いじめを見たらとめようとする」児童の割合<sup>5</sup>

<sup>3</sup> 出典 安心・安全アンケート

<sup>4</sup> 出典 安心・安全アンケート

<sup>5</sup> 出典 安心・安全アンケート

### 3-5. 体・心のケガ以外の変化

#### (1) 教職員の変化

安心安全な学校を実現していくために、今まで様々な教育活動を実施してきました。それらの取組みを ISS という枠組みの中でとらえ直し、ISS の取組みを教育課程の中に取り入れたことにより、教育活動の活性化が図られ、職員の意識が変わってきたことが、大きな変化です。また、様々なデータを取ることで、子どもたちを多面的に見られるようになったことも成果のひとつでした。

#### (2) 子ども達の変化

子ども達、特に、高学年の子ども達の表現力（伝える力）がついてきました。また、自分たちの学校は、ISS の国際認証校であるという自信と誇りが持てるようになってきました。さらに、6年生の児童の活動の様子を見て、5年生を中心として「次は自分たちの番だ」という自覚が生まれ、年々、子ども達の力がついてきています。全校朝会、集会活動等の5分前行動の定着、朝読（週3回）の定着、授業態度の向上等、学校全体が非常に落ちついた状態を保っています。地域の方から「あいさつ」がよくなったという評価をいただくことが多くなりました。

### 3-6. 学校が一番大変だったこと

認証に向けた申請書の作成が最も苦勞した点でした。国際認証の枠組みの中で、8つの指標を理解した上で、原稿をつくっていく作業にかなりの時間を費やしました。白石先生の8つの指標のとらえ方に関する講義をテープおこしし、職員が何度も何度も読み直し、試行錯誤する中で申請書を作成することができました。2年目に申請書の骨子を作成し、3年目に修正を加えていくという先を見通した段取りを考えました。このように、先を見通し、時間的な余裕をもって、試行錯誤しながら、8つの指標を常に頭に描きつつ申請書を作成したことが、申請書全体の整合性につながったと考えています。そして、そのことが、教職員の不安感を減少させ、教員全体で申請書を作っているという、職員間の絆を深めることができたと言えます。

また、教職員の異動、子ども達の卒業、進級などによる一時的な停滞の克服が大変でした。異動してきた教員に対しては、校内研修を集中して行い、学級によって差が生じないように配慮しました。他方、研究を推進していく中で、先生方が様々な分野で特技をもっているこ



図 18 「ISS ロード」「ISS 掲示コーナー」

とに改めて驚かされました。例えば、「ミナミン」の着ぐるみの作成では、異動してきた職員のアイディアで、どうしてもできなかった部分があつという間に完成し、課題を克服することができました。また、校内掲示に関する特技をもっている職員を中心として、1階ホールにインパクトのある「ISS ロード」「ISS 掲示コーナー」（図 18）を完成させたことは大きな成果でした。

### 3-7. 心に残っていること

本校は全校児童 180 名程度の小規模校で、通常学級 6 学級の単級学校です。

ISS の活動を通して、子ども達は無限の力を秘めている存在であるということを改めて認識させられました。1 年目より 2 年目、2 年目より 3 年目と、高学年の子ども達に自信が付き、ISS の取組みを下級生に伝える力（表現力）がついてきたことを実感しています。

私は、月 1 回行っている全校朝会（図 19）ではパワーポイントを使い、ISS をベースにした話をするようにしています。例えば、熊本で地震が起これば地震の話、不審者の事件があれば不審者対応の話・・・そしてその内容を必ず HP にアップすることにしてしています。

朝会の中では、ISS 代表委員や高学年の児童に、自分の考えを話す機会を必ず設け、朝会終了後に校長講話の感想を書かせています。ISS 代表委員会委員長にはその場で朝会のまとめをさせ（図 20）、ISS 代表委員、高学年の児童を中心として、多くの子ども達に発言の機会を作ることにしてしています。突然指名されても、動じることなく自分の考えを発表できる力がついてきています。そのことが、ISS の活動の最も大きな成果であると考えています。

本校では、ISS の伝統を継続していくために、小規模校のよさを生かし意図的に 6 年生が中心となって活動している ISS 代表者会議に 5 年生も参加させることにしました。5 年生は、6 年生の活動を見る中で、自然に ISS の下地が身につく、来年は自分たちの番だという意識が高まってきました。そのことによって、「やらされ感」がなくなり、子どもの目の輝きが違って来たのではないかと考えています。4 年目の本年度も ISS 活動報告会での 6 年生の発表はすばらしく、読み原稿も必要なく、大きな声で発表できていました。



図 19 全校朝会



図 20 ISS 代表委員長の話

また、「南っ子安心安全ネットワーク会議」を継続して開催することで、地域との結びつきを強化したことにより、事前審査、認証式典には、300 人を超える方々に参加いただけたことが心に残っています。南小学区の方々の底力を実感することができました。

さらに、PTA 活動として「ミナみんなマスコットづくり講習会」（図 21）を開催できたこと、南小卒業生から「ミナみんなマスコット」（図 22）が送られてきたこと、そして、ISS の主役は子ども達であるという考えの下、子ども達一人一人が目を輝かせて、子ども達が主役となる事前審査、認証式典を開催できたことが最も印象に残っています。



図 21 ミナみんマスコットづくり講習会



図 22 卒業生から送られてきた「ミナみん」

## 4 今後の展開について

### 4-1. 現在の課題や心配事

3年後の再認証時には、現在の職員はほぼ在籍していない状況にあります。そのため、管理職がISSについて理解を深め、リーダーシップを発揮し、それぞれの職員のアイデアを生かしながら、学校全体でISSを推進していくことができるかが問われます。

また、児童、教職員にはISSが浸透しているものの、保護者、地域の方々にISSを理解してもらうための啓発活動を継続的に進めていくことが課題となっています。

### 4-2. 今後、南小学校でチャレンジしてみたいこと

新たなことにチャレンジする余裕はないですが、認証後の平成28年度は、子ども達や職員の提案で既存の取組みのバージョンアップが図られています。今後とも、子どもが主体となるISSを実践していきたいです。

### 4-3. これから取組む学校に対するメッセージ (ISSで子どもが変わる)

子どもの力、職員の力を信じること。安心・安全な学校はどの学校でも実現していかなければならないことです。まず、データの分析を通して、自校のISSの課題を明確にしていくことが重要となります。今まで自校が行ってきた安心安全の取組みを、ISSの視点から見直していくことも必要です。

ISSの取組みは、一部の教員だけがやっても意味のないことです。ISSの取組みを通して、子どもにどんな力をつけていくのかを明確にすること、また、職員や地域がもっているリソース(資源)を有効に活用していくことが、ISSを成功させることにつながっていくのでしょうか。